

*Fillmore*TM 25

取扱説明書

Hello from the Tone Farm

この度はFILLMORE™をご購入いただきありがとうございます。そしてMESA/Boogie®ファミリーへようこそ！あなたが選んだこのアンプは、ビンテージ・チューブアンプが持つ最上級の品格と、革命的な発明であるスイッチングで切替可能なハイゲイン・チャンネルを併せ持ったモデルとして深い伝統をまっています。このアンプが持つ完璧な機能性を一目みれば、それがあらゆるものをインスパイアするツールを満載しながら、その中身はかつてMESAのMARK I™や最初期のモダン・ギターアンプ(偽物にご注意下さい)の革新的な回路や機能の伝統に基づいています。ですから、我々はあなたの選択をお祝いしたいと思います...いかなる点でも比類の無い、オリジナルであるこのアンプを演奏すれば誇らしい気持ちになることでしょう！まさにあなたのように！

我々は45年以上に渡って、素晴らしいものを提供することをミュージシャンに対しての真摯な約束として考えており、我々自身がそうして欲しいと望むように、1人1人の方に対応しており、選択したアンプについて本当に納得してもらえることを保証しています。また我々は、あなたの新しいアンプがあなたを微笑ませ、最初にアンプにプラグインしてからもの数分であなたをインスパイアさせる自信があります。ですが本当に喜ばしいことは、最初にお金を払ったことが記憶から消し去られた後に、さらにあなたが新しくそしてインスパイアされるサウンドを発見することであり、FILLMORE™はその真の価値を表し続けるでしょう。

我々は、ご自身のサウンドを実現するためにMESAの製品を選んで下さったことに感謝すると同時に、日々の努力が報われる手助けが出来ることを願っています。この取扱説明書は、それを実現するのに役立つことでしょう。あなたは今、限りない表現力を持つ楽器を手に入れているのです。さあ、遙かなる音楽の旅に出かけましょう。MESA®のスタッフ全員があなたを応援します！

Fillmore™ 25

Table of Contents

使用上の注意	
OVERVIEW	1-3
GETTING STARTED	4
役立つヒント	5

FRONT PANEL

GAIN	5-6
TREBLE	6
MID	7
BASS	7-8
PRESENCE	8-9
MASTER	9
CHANNEL SELECT	9
MODE SELECT	9
POWER	9
STANDBY	9-10

REAR PANEL

AC MAINS SOCKET	10
FUSE	10
EFFECTS LOOP (SERIES)	10-11
REVERB FOOTSWITCH	11
REVERB	11-12
SPEAKER OUTPUTS	12
FACTORY SAMPLE SETTINGS	14-15
USER SETTINGS	16-17
TUBE TROUBLESHOOTING GUIDE	18-19
SPEAKER HOOKUP GUIDE	20-23
TUBE TASK CHART	24
PARTS LIST	25

使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従って設置して下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発生する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは2つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のもので、自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意:安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意:必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはプロスペック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい!

Fillmore™ 25

取扱説明書

OVERVIEW

Fillmore™ 50™は、Boogie® アンプのファミリーから枝分かれした、新しいヴィンテージのボイスिंगとスタイルをもったアンプです。ソフトクリップしたサウンドからサチュレーションが効いたゲインサウンドーMESA/Boogie史上最も表現力豊かなクリーンからメディアムゲインのサウンドがフィーチャーされています。

このアンプにはいくつかの正反対とも言える特徴が集約されています。トラディショナルなルックスとサウンドのキャビネットデザインながら、それぞれに3タイプのパワフルなモードをもつ全く同じ構造のチャンネルを2つ備えたアンプレアウトとなっています。基本的な回路の構造については、1950年代最高のデザインのアンプに敬意を表しながら現代のニーズを満たすためのモディファイやアップデートが施されており、このクラシックサウンドを最大限に引き出すためのハイパーチューニングによってそのスピリットとキャラクターに満ちたハイゲインパフォーマンスを実現しています。瞬間的かつ直感的に欲しいサウンドに辿り着くためのシンプルなコントロールは、機能が豊富なアンプでしか得ることのできないような汎用性も持ち合わせています。しかし私たちにとっては、“クラシックな”アンプの進化においてこれは明らかに自然なステップです。

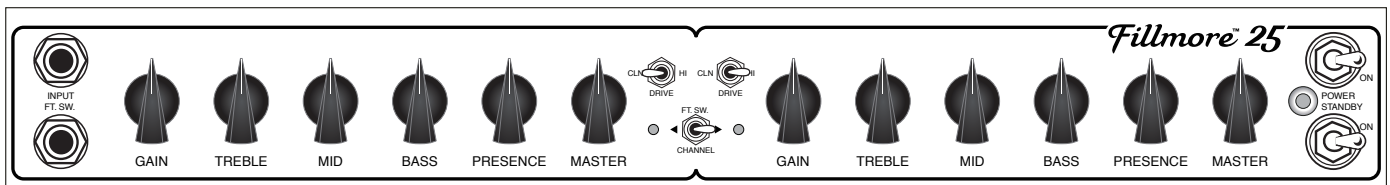
Fillmore™は単にBoogieファミリーに新たに加わったアンプではありません... ニュータイプのBoogie DNAを生まれ持ったアンプなのです。そして、ソウルフルなサウンドを奏でるこのFillmoreには、MESA/Boogie社草創期に誕生したBoogieアンプのルーツとも言えるサウンドのDNAが刻み込まれています。Randall Smithが初めて生み出したBoogieアンプもFillmoreと同じ構造に基づいていました。Carlos Santanaがアルバム“Abraxas(天の守護神)”で使用したことによってMark Iのサウンドと回路が一躍脚光を浴びることになりましたが、これは“MARK I Experiment(MARK Iの実験)”が成功して納めた1つの結果に過ぎません。Fillmoreが、その美しさと本質を蘇らせます。

クラシックロック界の大物たちがライブを行った、アメリカ東海岸ー西海岸にあった今や伝説となっているライブハウス“Fillmore”に敬意を表してその名を冠したFillmore 50は、非常にレスポンスで繊細な音のニュアンスを表現し、実際にこのアンプをプレイしたギタリストたちから“vintage-inspired Magicーヴィンテージサウンドにインスパイアされた魔法の箱”と呼ばれています。絶妙なサチュレーションは、あなたのプレイスタイルをさらに魅力的に響かせることでしょう。

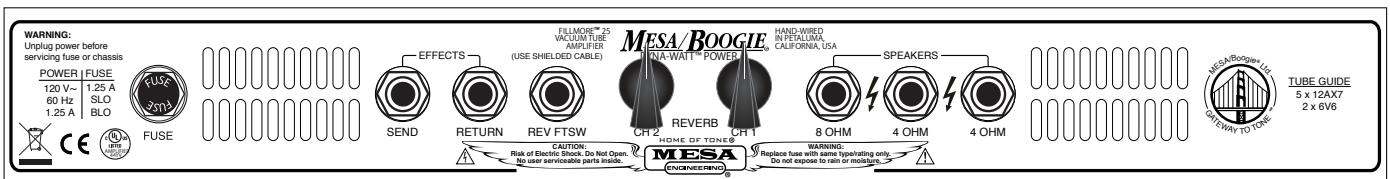
Markシリーズの成功により、長らく眠り続けてきたBoogieの新しいアンプFillmoreを今すぐに体験してください。このアンプがもたらすインスピレーションがないまま、あなたはすでにあまりにも多くの時間を過ごしてしまいました。さらに時間が経った後で情報を得ることもできるでしょう。ですが、MESA/Boogie社は、強い決意とともにFillmoreをMESA製品の中で一番操作性面で扱いやすいアンプとして生み出しました。

Boogie 最高の秘密だったFILLMORE™がついに明かされ、新しいレベルの情熱の火を灯すためにあなたを待っています。私たちは、このアンプがあなたをその場所に連れて行けると確信しています。

FRONT VIEW: FILLMORE™ 25



REAR VIEW: FILLMORE™ 25



IDENTICAL CHANNELS(同一チャンネル)

FILLMORE™は2つの同じレイアウトのチャンネルを備えています。クリーン～オーバードライブの全てのニーズをカバーする3つのモードがあり、事実上、想像しうる全てのサウンドをその中で見つけることができます。

私たちは何十年にもわたって、ほとんどのプレーヤー、特にFILLMORE™が目指すスタイルのカテゴリーでは、同じゲインストラクチャーのわずかなバリエーション、またはサウンド的に密接に関連した異なるゲインストラクチャーを使用する傾向であることを発見しました。Fillmoreの同一チャンネルのプラットフォームは、非常に幅広いスタイルとプレーヤーのためのフットスイッチで切替可能な2チャンネルのフォーマットで、最大のフレキシビリティを実現しています。

2つのチャンネルのモードをCLEANに設定し、1つを完全クリーンのコードワーク用に、もう1つをプッシュ、もしくはソフトクリップさせたコードワークやシングルノートでのプレイで使用したり、お好みのオーバードライブペダルと合わせて使用することができます。他にも、いずれかのゲインモードを使用したクラシックなクリーンとオーバードライブサウンドの組み合わせや、さらに、チャンネル1のDRIVEモードでランチリズムサウンド、チャンネル2のHIモードでハイゲインのリードトーンを設定することもできます。Fillmoreのチャンネルレイアウトとモード機能によって、サウンドの組み合わせに無限の可能性があるのです。それら全てを探求し、自分に最もマッチするサウンドと切替可能なオプションをどう使用するかはあなた次第ですが、MESAでは何よりもそれを簡単かつ直観的に行えることがベストであると考えました。

THE CHANNEL MODES

CLEAN

Fillmoreのプリアンプの構造は、ハスキーなヴォイスिंगで簡単にクリップさせることができる1950年代の“Tweed”アンプの回路に寄せたデザインとなっていますが、CLEANモードでGAINが半分以下の低い設定のときには、カリフォルニアで長年愛されてきたレジェンドアンプとも呼ぶべき1960年代のBlackfaceアンプの回路に寄せたサウンドになるようにデザインされています。GAINコントロールが1時以下の設定のときには、豊かな輝く高域をともなったワイドレンジの美しいクリーンサウンドとなります。

CLEANモードのサウンドのアップパーエンドがクリップするまではこのようなサウンドをキープしますが、3時以降に近づくにつれて実際のクリッピングサウンドの領域に入ってくると、このアップパーレンジが信じられないほどめまぐるしく変化するレスポンスをもたらします。この高域の透明なきらめきは、クリッピングしてサチュレートしているときに、サウンドがうるさすぎずかつ薄くもならず完璧なトップエンドにスムーズに移行します。歪んでいないのに音がサステインするようなイメージに近くなります。それは私たち全てのギタープレーヤーが夢見るトーン、あるいは少なくともソロをプレイするときに欠かせない要素としてサステインを必要とする、全てのプレーヤーのためのトーンです。

この2つの異なるトーンが移行するゾーンは1時～3時で、トーンの太さ、プッシュ感やカラーをギターのボリュームコントロールで操作すれば、多くのプレーヤーがパーフェクトな“CLEAN”を手に入れることができます。同様にオーバードライブペダルとも相性が良く、トップエンドはしっかりとキープしながらも、サウンドが過度に尖ってしまったり、バズが追加されたりするようなことはありません。この中間のゾーンは、さまざまなギターのタイプ、プレイスタイルやオーバードライブペダルと組み合わせても非常にマッチする優れた特性を備えています。このゾーンよりも下側の設定にあたるピュアクリーンサウンドのゾーンや、その上側のゲインリッチなゾーンよりも幾分狭い範囲になりますが、これらのポピュラーともいえるトーンの中間に挟まれたゾーンでローエンドとトップエンドのレスポンスの便利なグラデーションになっています。

DRIVE

DRIVEモードは、クリーンでもなく深いサチュレーションサウンドでもないちょうど“中間”の、トリッキーで難解なギターサウンドにおける本来のドライブサウンドのモデルとなっています。このモードでは、CLEANモードでもっとも歪ませたポジション(実際にはGAINを回しきったポジションよりも少し前)から、HIモードで得られる半分ほどのほぼ“ハイゲイン”の状態までの歪みを得ることができます。しかし、より丸みと暖かみのあるHIモードのヴォイスिंगとは異なり、DRIVEモードではCLEANモードにも似たトップエンドのレスポンスを備えています。このナチュラルなトップエンドはハーモニクスをもたらす、コンプレッションがほとんどないレスポンスを可能にするため、コードワークや豊富なダイナミクスを伴ったシングルノートのソロワークに非常に適しています。

CLEANモードと似たキャラクターをもつDRIVEモードでは、GAINコントロールの12時のポジションより下の領域にフィルタリングされていないハーモニクス成分を多く含んでいます。そのポジションを超えるとよりオーバードライブしたキャラクターが支配的になり、最終的に3時のポジションを超えるとさらにサチュレートしたサウンドが生成されます。HIモードとは異なり、この状態になってもアップパーレンジはしっかりとトップエンドをキープし、用途にもよりますが、スムーズなシングルノートのソロサウンドを求める場合にはTREBLE、MID、PRESENCEのコントロールが重要になります。これらのトーンコントロールはそれぞれがMID成分を含むトップエンドを備えているので、

適切なブレンドになるように試してみてください。このコントロールの比率はコードワークにはそれほど重要ではありませんが、GAINコントロールを上げていくにつれて全体的にかなりのハーモニクスを含んでいきます。Indy Rockや "Nashville Clean" スタイルの多くで必要とされるように、これはオーバードライブしたコードワークを表現力豊かに妨げることなく“オープンに”響かせる目的があります。スムーズで歌うようなシングルノートのソロを求めるとすれば、上記の3つのトーンコントロールを低い領域で設定する必要があります。

HI HIモードは、各チャンネルの3つのモードの中で最もハイゲインで、DRIVEモード同様に繊細な表現力のクリップから激しいオーバードライブまで幅広いサチュレーションサウンドを備えています。DRIVEモードとHIモードのオーバーラップはGAINコントロールのセンター付近までで、そこから上の領域では、モダンなメタルサウンドを除けばほとんどの場合で十分なサステイン、ハーモニクス、コンプレッションを引き出し、全ての真空管のサチュレーションをさらに解放し始めます。そのサウンドのテーマは、数多のレコーディングで使用されてきた70年代後半～80年代前半のCrunch RhythmやLeadサウンドに敬意を払ったものとなっており、当時のMESA/Boogieアンプのサウンドと、同時に人気のあったクラシックなブリティッシュアンプのサウンドを最高の形で追求したものとなっています。このモードは、50年代にカリフォルニアで誕生したすばらしいツイードカバーのアンプに近いアメリカンな回路に仕上がっています。GAINコントロールを12時以上に設定したときにビーストとも言うべきサウンドが現れるように、レースショップでのアプローチと通常の“Tuning(チューニング)”を合わせた、MESA/Boogieでは“Toning(トーニング)”と呼んでいる作業が施してあります。

HIモードではまた、トップエンドがやや丸くなり、ハーモニクスがより良いシングルノートのレスポンスと歌声のようなキャラクターを生み出すように形成されています。このヴォイスイングはシングルノートのソロプレイに非常によくマッチしているため、メロディーワークでの歌うようなトーンを可能にします。また、TREBLE、MID、PRESENCEを少し高めに設定すると、DRIVEモードのヴォイスイングに近くなることがあります。しばしば、特にDRIVEモードのサウンドからHIモードへ移行したときに、最初はサウンドがつかまったり、ロールオフしていたり、“オープンではない”ように聴こえることがあるかもしれません。これは、私たちの仕事においては非常によく知られていますが、必要以上にEQを操作することで求めるサウンドを見失ってしまうEQハングオーバーに陥った状態です。明るいサウンドからより暖かみのある、ダークなサウンドに移行するときによく発生しますが、これはミッドレンジ周波数においても発生します。ミックス内のミッドが非常に少ないサウンドでは、ミッドレンジ成分がそのまま“箱鳴り”または“鼻にかかった”トーンとなります。ほとんどのサウンドでそういった傾向があり、少し時間を置いて耳を調整した後で聴くことで判別することができるでしょう。

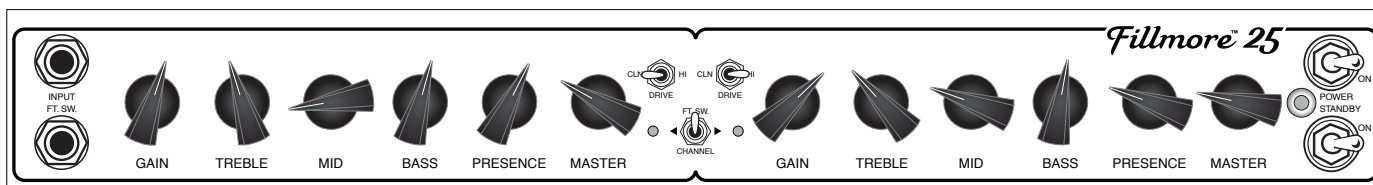
一部のプレイヤーは、楽器側のボリュームコントロールの調整だけで、HIモードでクリーンとオーバードライブサウンドの両方を使い分けています。ボリュームポットをロールバックしたときにピックアップのサウンドがどの程度明るくなるかはギターにもよりますが、これは確かに両方のサウンドを得るのに有効な方法です。しかし、DRIVEモードではトリミングされたハーモニクスが少ないので、最適なオーバードライブサウンドに必要なサチュレーションの量に応じて、全てのゲインストラクチャを網羅するには1つのモードを使用の方がDRIVEモードでは良い結果が得られます。これは、事実上フィルモアの2チャンネル構成においてさらに別のサウンドオプションを加えることができますが、同一2チャンネルの仕様においては好みサウンドを別のサウンドのために犠牲にする必要がないことを忘れないでください。

GETTING STARTED

1. アンプを箱から出したら、全ての真空管がソケットにしっかりと取付されていることを確認してください。
 2. 電源ケーブルを接地された(3ピン)コンセントに接続します。
 3. フットスイッチを箱から出して、付属のモノラルケーブルでフロントパネルの一番左のFT. SW.ジャックに接続します。
 4. ヘッドタイプの場合は、スピーカーエンクロージャーをリア・パネルの適切なインピーダンスマッチングしたSPEAKER OUTPUTに接続します。通常は8ΩのSPEAKER OUTPUTジャックに接続します。初めてこのダイナミックで爆発的なレスポンスを誇るアンプを使用する場合は、最大限のパワーポテンシャルと最高のトーンバランスを確かめるために8Ωの負荷での使用が望ましいでしょう。コンボタイプは8Ωスピーカーを内蔵しており、適切なインピーダンスのSPEAKER OUTPUTに既に接続されています。そうでない場合は、スピーカーケーブルを8ΩのSPEAKER OUTPUTジャックに接続し直してください。
 5. POWERスイッチをONにした後、STANDBYスイッチはSTANDBYのポジションで30秒以上待機します。これにより、真空管内でフィラメントが使用される前にウォームアップされます。このコールドスタートの手順を毎回行うことで真空管の寿命が向上します。
 6. エフェクトプロセッサをEFFECTS LOOPに接続する場合は、ここで接続してください。適切な接続と操作についてはこのマニュアルのEFFECTS LOOPの項を参照してください。まず最初に、プロセッサを使用せずにアンプのサウンドをチェックすることをお勧めします。プロセッサを使用する前にアンプオンリーのサウンドを聴いてアンプそのもののサウンドを知ること、プロセッサがアンプのサウンドを損ねた場合に気がつくことができるでしょう。Loopを使用する場合は、プロセッサ側のINPUTレベルが中～低設定かチェックして、FILLMORE™のSTANDBYをONにしたならレベルをゆっくりと上げていってアンプからのSENDレベルを確認してください。
- NOTE:** ペダルタイプのプロセッサには、クリッピングライトを搭載しているものもありますが、入力レベルインジケータを搭載していない場合があります。このようなタイプのパダルにおいては、聴感上の感覚を頼りにレベル調整を行ってください。
7. 以下のサンプルセッティングにしたがって、TONEの新しい世界を巡るツアーに出るためにまずはこれらに近い値でコントロールを設定してください。このセッティング例は、膨大なサウンドの可能性を垣間見るだけのものであり、チャンネルの設定を行うための1つのサンプルだということを忘れないでください。あなたの思い通りに自由にサウンドを調整してみてください...音色が損なわれることはありませんし、それが最高のサウンドを出すための方法なのです。
 8. STANDBYをONにして演奏を楽しんでください!

サンプルセッティング

アンプをまだ演奏していないのであれば、このサンプルセッティングはチャンネルを設定する多くの方法のうちの1つの例に過ぎません。こちらは、チャンネル1のクリーンサウンドと、チャンネル2のメディアムゲインソロサウンドのサンプルセッティングになります。



役立つヒント

NOTE: 重複する情報について:このマニュアルを読み進めていくにつれて重複する情報やセクションが出てくると思いますが、これは注意喚起のために繰り返されています。興味のあるセクションしか読まない方にも注意を向けてもらうことができ、またFILLMORE™について知っておかなければならない重要なポイントを繰り返している場合もあります。最初から最後まで漏らさず読む方にはご迷惑をおかけしますが、将来このマニュアルの特定の部分を素早く参照する際に有効になるはずです。

・DRIVEモードとHIモードでは、特にGAINが高めの設定のときにはBASSコントロールをあまり高く設定しないように注意して下さい。BASSコントロールを過度に上げると、アタックがぼやけてレスポンスが遅くなります。基本的なルールとしては、GAINを上げるときはBASSの設定を下げてください。

・各モードにおけるGAINとTREBLEコントロールは、最もよく効くトーンシェイピングコントロールであるため、調節の際には注意が必要です。それらは全てのモードにおいてアタックの性格やサウンドの方向性のほとんどを決定します。全てのモードで聴くことのできる優れたサウンドの多くは、これら2つのコントロールが真ん中くらいの設定のときに発揮されます。

NOTE: GAINが高めに設定されているときは、真空管のマイクロフォニックによる金属的なノイズを発生させないためにTREBLEの設定をあまり高く(2時以上)上げないようにして下さい。

・アンプを演奏するときは、少なくとも1台のスピーカーキャビネットをフロアに接地させて、その同じ場所で立って演奏した方がサウンドがより良く聴こえたり感じたりするかもしれません。アンプ(またはスピーカー)をフロアに置くことで、共鳴効果や、特に低域が伝わることによって、アンプのサウンドが太くなり、また弦の感触をしっかりと感じ取れます。ステージのような木製のフロアだと本当に素晴らしいので是非試してみてください・・・ギターというのは面白い楽器で、2日続けて同じサウンドに聴こえるということがあまりなく、毎晩、または演奏する環境によって異なるように感じますので、あらゆるメリットを活かすべきです。この方法は本抵の場合に役立ちますが、1つ例外を挙げるならステージ上にたくさんのマイクが設置されているときです。そのような場合は、共鳴したフィードバックを最小限にするためにアンプをステージから高く設定する必要があるでしょう。

・アンプの電源がONの時は、常にSTANDBYスイッチを使用して下さい。セッティングやケーブル接続の合間等、数分でも演奏しない時は常にです。そうすることで、真空管の寿命を延ばすことができます。

・FILLMORE™のような、MESAの持つもう1つの(MARKではないアンプのような)側面から生み出された回路によって、TREBLEとPRESENCEの設定を低めに設定するとより暖かみのあるサウンドが得られます。ギターの木材やピックアップ、演奏技術にもよりますが、これらのコントロールを12時以下に設定すれば実際に素晴らしいサウンドが得られます。必要であればTREBLEやPRESENCEを反時計回りに回しすぎてしまい、MIDの帯域がかなり強いトップエンドをカットしたサウンドを得ることも出来ます。

・FILLMORE™では、TREBLE、MID、PRESENCEの各コントロールで異なるトップエンドの周波数が得られます。これらの強力なコントロールのそれぞれが、ミックスにおいてバランスを取りながら、さまざまなスタイル、キャラクター、レスポンスなどにフィットするトーンを作り出す“swap the top”の方法を理解して慣れてみてください。この3つの強力なトーンと“ダイナミック”コントロールによって、通常よりも短い時間で素早く簡単にアンプを設定することができます。

FRONT PANEL

GAIN

これは、一連のトーンコントロールの中で最も強力なコントロールです。そのセッティングによって、選択したモードのスタイルや方向性を決定します。モードに応じて異なるチューブステージのゲインを測定し、インプットステージのヘッドルームを設定します。これにより、サウンドがクリーンなのかオーバードライブしているのかが決定されます。また、チューブステージのゲインの増減に伴って繊細なトーンコントロールとしても機能し、サウンドに独自の“カラー”を与えます。

全てのモードには、3つのGAINコントロールの領域があります。8時～11時半の間のローゲインのゾーン、11時～2時のより暖かみのあるサチュレートしたゾーン、そして2時半～5時のよりハイゲインなゾーンです。どのゾーンも多様な用途に使用が可能で、全てがコードワークにもシングルノートのソロワークにも対応することができます。GAINコントロールがその領域全体でスイープするので、異なるテクスチャとトーンキャラクターを発揮します。

一般的に言えば、両方のチャンネルのモードでコントロールが低いとき(8時半から11時半)はサウンドがブライトになり、よりオープンなキャラクターとダイナミクスを生成します。この領域は、CLEANモードの最大のヘッドルームによって歪まない輝きのあるコードワークを可

能とするクリーンサウンドに最適で、トップエンドの倍音が弾けてアタックがとて速くなっています。DRIVEモードとHIモードは、ゲインがわずかなこのゾーンでスレッシュホールドサウンドを出力するように調整されていますが、ギターが本来持つキャラクターが損なわれることはありません。サチュレーションによって圧縮されていないダイナミクス豊かなサウンドがそのまま残っているため、DRIVEモードとHIモードではクリッピングしたコードワークに使用するのに最適です。

GAINコントロールの中域(11時~2時)は、もっともバランスが取れたサウンドが得られるところで、暖かみのある豊かなサウンドで、アタックがきめ細かく、良いダイナミクスを持ったサウンドを作り出すことが可能です。CLEANモードでは、素晴らしいコードワークのレスポンスと豊かさ、そしてまたコシのあるサウンドが得られます。ピックアップの種類や出力の強さにもよりますが、ここはヘッドルームが減少を始め、ゲイン的にクロスオーバーするポイントの近くであるため、クリーンサウンドとかすかなサチュレーションの間でクリップしないように注意しなければなりません。DRIVEモードとHIモードで最も表現力豊かな最高のサウンドのいくつかはこのゲイン領域で得られますが、理由は音がここから良い感じにこもり始め、美味しいチューブ・オーバードライブのサウンドが得られるからです。DRIVEモードとHIモードで12時ぐらいに設定すると、コードワークをクリップさせたりシングルノートでのプレイにマッチした十分な歪みが得られますが、コンプレッション感はそれほど多くはありません。

GAINの一番高めの領域(2時~5時)は、特にDRIVEモードで、完全に歪んだサウンドとなります。ここからはシグナルがローエンドで太くなり、トップエンドが減少してよりコンプレッションのかかったサウンドになります。ダイナミクスもより低いピークで少し緩やかになり、よりスムーズで滑らかなフィーリングとなります。CLEANモードでGAINコントロールをトップエンドに設定すると、インプットステージが歪み始めてすばらしいブッシュサウンドを生み出します。GAINコントロールのこの範囲では、CLEANモードをヴィンテージインスパイアされたシングルノートのソロプレイも可能な、魅力的な、表現力豊かなモードへと変化させます。また、ダイオードやチューブベースのオーバードライブペダルとも非常にマッチします。

DRIVEモードとHIモードの両方で、GAINコントロールをトップエンドに設定すると非常にアグレッシブなサウンドになり、Crunch RhythmやRockサウンドにおけるソロプレイの真価を発揮します。ここにはどんなスタイルにもマッチする豊かなゲインが存在するので、おそらくモダンメタルを除いては、ハーモニックレイヤーが厚く積み重ねられたコードワークや、非常に表現力豊かでニュアンスのあるオーバードライブのシングルノートまでを生み出します。

GAINを高めに設定すると、TONEコントロールが効果を段々失っていくのに気付くでしょう。1つ1つの音がかなり歪んで、そのキャラクターはそれぞれのチャンネルのポインティングと、どのようにそのゲインレベルに反応するかでほぼ決定されます。もしアドバイスさせて頂けるならば、GAINコントロールは可能な限り必要以上に高く設定しない方がオーバードライブのベストなバランスを得られますし、TONEコントロールも十分効きます。またアタックも歪みすぎることなく“スローダウン”するので、常に表現力豊かでエモーショナルなサウンドを得ることができるのです。

FILLMORE™では、TREBLE、MID、PRESENCEの各コントロールで異なるトップエンドの周波数が得られます。これらの強力なコントロールのそれぞれが、ミックスにおいてバランスを取りながら、さまざまなスタイル、キャラクター、レスポンスなどにフィットするトーンを作り出す“swap the top”の方法を理解して慣れてみてください。この3つの強力なトーンと“ダイナミック”コントロールによって、通常よりも短い時間で素早く簡単にアンプを設定することができます。

TREBLE

GAINが最もパワフルなコントロールだとすると、TREBLEは2番目となります。TREBLEコントロールは、チャンネル全体のキャラクターのシェイピングを行います。残りのTONEコントロールを支配するので、全てのモードにおいて豊かでバランスの取れたサウンドにするためにはこのセッティングは非常に重要です。TREBLEの設定はTONEコントロールでハーモニーを形成するのに極めて重要だと理解した上で慎重に行わなければなりません。

TREBLEを真ん中の領域で設定した場合は3つの全てのモードにおいてベストなバランスとなり、十分ブライトでありながらそれでいて豊かで暖かいサウンドとなります。最初はTREBLEを11時からスタートして、お好みのトーンが得られるまで少しずつ上げたり下げたりすることをお勧めします。しかし、MESAの持つ“もう1つの側面”から生み出された回路そしてそのDNAによって、TREBLEとPRESENCEの設定を低めに設定するとより暖かみのあるサウンドが得られます。ギターに使用されている木材やピックアップそして演奏技術にもよりますが、それらのコントロールの設定を12時以下、場合によっては非常に低く設定すると実際素晴らしいサウンドが得られますし、必要であればTREBLEやPRESENCEを反時計回りに回しきって、MIDの帯域がかなり強いトップエンドをカットしたサウンドを得ることも出来ます。

DRIVEモードとHIモードにおいては、MIDコントロールはTREBLEにいくらか近い領域をカバーし、そのセンターは中高域と中低域と連動しています。この特異性を有効に使う、TREBLEを“通常”よりも低めに、反対にMIDを少し高めに設定してみてください。TREBLEを低め、または極端に低くしたり反時計回りに回し切ると、とてもクールなサウンドが得られます。これら2つのパワフルなコントロールの相互作用をチェックして、頭の中で聞こえるサウンドを現実のものにすることが重要になります。

MID

MIDコントロールはミッドレンジの広い範囲で作用し、TREBLEのセクションで述べたように、かなりの量の"低～高域"の周波数が伴います。この高域は、TREBLEやPRESENCEのものよりも低い領域ですが、サウンドミックスの中でアンプのサウンドにパンチを与えたり抜けを良くするときに重要です。

CLEANモードでのバックিং、しかしながら実際は広く全てのチャンネルにおいて、MIDを低めの設定(7時半～10時)にするとミッドレンジのアタックをいくらかカットしボトムエンドをより息づかせ、ハーモニクスがトップエンドに影響してよりきらめく高域が増したオープンなサウンドとなります。また、この領域は演奏しやすく、弦を弾く際により弾力を感じることでしょう。シングルコイルのギターであれば、タイトでゴムのようなアタックと弾むような低音のキャラクターが得られ、ブルーズやR&B、カントリーなどほとんどクリーンサウンドのスタイルにマッチします。

MIDの中間の領域(10時～1時)では、パンチとアタックが大きくなり、より性急さも加わって、マホガニーギター使用時の抜けを良くしサウンドに輪郭を与えるの最適です。トップエンドがMIDコントロールの範囲の中で姿を現し始め、コードサウンドがより押し出され、パンチの効いたキャラクターとなって美しく鳴り始めます。

コントロールをさらに上げると(1時～5時半)アグレッシブなサウンドとなり、MIDの領域内で支配的かつ過激なトーンを生み出します。この範囲になると、MIDの設定が高すぎて隠れてしまったトーンの豊かさや暖かみを、BASSコントロールを上げて戻そうと試みるかもしれません。もしMIDのこの領域のアタックや性急さが好みであれば、他の全てのコントロール(MASTERを除き、サウンドが前になるように)を高めに設定してMIDのカーブに追従するようにします。これで良いのですが、プリアンプのヘッドルームがこのトーンの激しい競争によって食べ尽くされてしまうので、TONEコントロールの設定から来る高いレベルの信号によってプリアンプがクリップし始めます。

DRIVEモードやHIモードのゲインサウンドも、MIDの設定が上がると同じようになります。低めの設定(7時半～10時半)ではワイドで、跳ねるようなフィーリングのコードサウンドや、よりまるやかでスムーズなシングルノートのトーンが得られます。ゲイン回路によって作られる高次倍音はTREBLEによって大きくコントロールされますが、艶のある立体的でハーモニクスに富んだかすみサウンドにかかり良いフィーリングになります。

MIDが10時を過ぎるあたりから、より豊かなミッドレンジのパンチを伴ってサウンドの抜けが良くなってきます。この領域は、GAINコントロールを中ぐらいに設定するとクラシックなクランチサウンドが得られます。このMIDのキックは過去40年続くロックに不可欠の、アイコン的なミッド・ゲインのインパクトがあってタイトなサウンドを形成するのに重要な部分です。DRIVEとHI両モードでは、シングルノートのサウンドはスピードや暖かみを伴いながら大きく前へ出てきます。

1時を過ぎると、中域の周波数で抑えられていた激しさが解き放たれ、トップエンドが大部分を占めてきます。ここは、TREBLEコントロールよりもより広い範囲で、より前へ出たアグレッシブなアタックが求められる領域です。弦を弾く感触がよりシビアになって、あなたの演奏が時間軸でより顕著にアウトプットされます。この領域は、ミックスの中でより前へブッシュした、Rock rhythmサウンドに適しています。シングルノートのソロサウンドは小節線のオリジナルの位置に忠実に、聴く人の耳に速く正確に伝わります。

1つお勧めとして、またはより注意事項として—MIDコントロールは、慎重に設定しないと耳に痛い周波数帯を含んでいます。頭をスピーカーキャビネットに近づけて、オーディエンスやマイクにどのように音が拾われているかチェックしてみてください。MIDを高めに設定すると、それがどれぐらい衝撃があるのか—もしかしたら耳障りなのか—を知って驚くと思います。人々の耳を傷付けたくないのであれば、それは良いアイデアではありません。MIDを中～低めに設定しても、十分なアタックがありなおかつサウンドはバランスが取れて暖かみがあるので、他の人々はあなたの演奏1音1音に顔をしかめることなく、楽しむことができます。

BASS

BASSコントロールは、サウンドに丸みをつける豊かなボトムエンドをブレンドします。異なるモードが選択されると内部のスイッチが作動し、サウンドスタイルに合わせて低域の周波数と量が変化します。これはそれぞれのサウンドにとって非常に重要で、トーンキャラクターの大部分を占めています。

CLEANモードではより低めのBASSの帯域をコントロールして深みや立体感、エアー感をサウンドに加えます。DRIVEとHIGH両モードでは、BASSのより高めの帯域をコントロールしてレゾナンスを作り出し、追加されたゲインによってサウンドをタイトかつ軽快にします。この帯域はCLEANモードの低めの帯域と比較すると、おそらくここでは妨げになる帯域となりますが、より大きな割合で使用することができます。これらの2つの帯域でそれぞれ異なる設定が出来るということが、チャンネル間でバランスよく、フットスイッチ操作によって素晴らしいサウンドを生み出すのに重要なのです。

CLEANモードでは、サウンドに暖かみや迫力をブレンドするのにBASSコントロールでバランスを取ることが出来ますが、ミックスの中でアタックやきらめきは強くはありません。GAINの設定によっても異なりますが、GAINをより低めにすると少し高めのBASS設定が可能になります。ベストなポイントについては色々試してみることが必要ですが、大まかなガイドラインとしては、GAINを上げたらBASSは下げたほうがよいでしょう。このアプローチに従えば、より簡単にすばらしいサウンドを見つけることができるでしょう。

例:

- ・GAINを12時の位置にする場合 — BASSは1時の位置
- ・GAINを1時の位置にする場合 — BASSは12時の位置
- ・GAINを2時の位置にする場合 — BASSは11時の位置

繰り返しますが、これはコントロールにおけるコンセプトの大まかな1つの例です。使用するギター、スピーカーキャビネット、ルーム、ステージ上のライブ、屋内と屋外の違いなどによって、オフセットの差はこの例とは異なることがあります。

DRIVEモードとHIGHモードのBASSコントロールの高めの帯域は、CLEANモードの低域の設定よりもより高い設定が可能です。BASSの設定を12時から3時ぐらいに設定するのが一般的です。BASSを高めに設定するときはGAINを低めに、GAINを高めに設定するときはBASSの設定に注意することが必要です。GAINを下げる(9時半～12時)と、サウンドがよりタイトになり、BASSコントロールによって豊かなローエンドのエア感を作り出せます。GAINによって音が歪み始めると(12時～5時半)、音が分厚くなって低音が薄まり迫力が出てある一定のポイントまで低音の帯域は落ち着き始め、スタイルによっては妨げになることもあります。

BASSコントロールの素晴らしい点は、他のコントロールの影響を最も受けにくいことです。他のコントロールとの兼ね合いで、実際には最適なサウンドにならないように考慮する必要があるのはGAINだけです。TREBLE、MID、PRESENCEとは異なり、非常に高いミッドレンジからTREBLEの影響をはるかに上回るハーモニクス範囲まで、ワイドスペクトラムにわたるトップエンドとしての役目を共有しますが、リッチなローエンドを調整するという点でBASSは総合的なコントロールです。

PRESENCE

このコントロールはTREBLEより上の周波数を調節するもので、通常のトーンコントロールよりもシグナルパスのさらに下流の、パワーアンプのセクションに位置します。PRESENCEは、パワーアンプを押さえつけて、コンプレッションを加えサウンドをダークにしたり、燃えさかるようなアッパーハーモニクスを解放することが出来るコントロールとも考えることが出来ます。また、信号のダイナミクスを決定したり、アンサンブルのミックスの中での抜け具合を決定するという大変重要な役目も果たしています。

低めの設定(7時半～10時半)では、コンプレッション感を伴った暖かく丸いサウンドとなり、特に高い設定ではダイナミックなアタックが制限されます。設定を上げると(11時～2時半)、トップエンドが支配的になり、コンプレッション感は"抜け感"に取って代われ、ダイナミクスのピークが性急になります。コントロールをトップエンド(2時半～5時半)に設定すると、アッパーハーモニクスが支配した超アグレッシブなサウンドとなり、音楽的なバランスが取れないと幾分危険な領域となります。ハイノートが勇敢な耳をつんざくかもしれませんので、例えばスタジオ・レコーディングなどでのサウンドを隔離して処理できるような環境での使用をお勧めします。それでも、低音弦の演奏パートには非常にマッチしたオプションとなっています。この領域は、特にP.A.で大量のマイクを立てて同時に使用すると非常に危険ですので、注意してコントロールしてください。

クリーンサウンドでは、概して少し高め(10時半～12時半)の設定でより効果が得られますが、どのチャンネルでもオーバードライブが加わります。一旦歪み始めると、PRESENCEコントロールで設定された周波数は鋭く、また注意しないと非常に速いものとなります。オーバードライブしているコードワークは、シングルノートの演奏よりも高めの設定(10時半～12時半)が適していますが、シングルノートの場合は通常11時以下あたりに設定した方が丸くフォーカスされて歌うようなサウンドとなります。

NOTE: 前述のように、トップエンドのスペクトル全体はTREBLE、MID、PRESENCEの間で共有されています。それぞれの領域、パワー、およびキャラクターは、トップエンドの全体的な性質に含まれます。サウンドを設定するときは、これらの3つのコントロールすべてを使用し、それぞれのモードで全体的なミックスにおけるそれぞれの周波数と量のバランスを取ってください。

MASTER このコントロールは各モード/チャンネルの全体の音量を決定します(プリアンプ部の最終段に位置します)。GAINコントロールとのコンビネーションでプリアンプの信号強度(チャンネルのパラメーターを含みます)を、演奏する音量に合わせて決定します。使用するチャンネルでコントロールの設定が終わったら、MASTERコントロールで各チャンネルの音量のバランスを取って下さい。

チャンネルごとの演奏ボリュームを調整するのに加えて、MASTERは、シグナルパスの上流にあるGAINコントロールと連動して、EFFECTS LOOPのEFFECTS SENDレベルコントロールの役割も果たします。レベルはSENDで最適化されており幅広いサウンドに対応しているので、Loopを使用していないときはこれらの3つの要素がシームレスに連携してトーンが損なわれないように保護します。Loopを使用すると、プロセッサーのサウンドを損なうことなく、プロセッサーをFILLMORE™とうまく連携させることができます。ただし、シグナルパスの全てが“トーンを形成する要素”となるので、アンプのシグナルパスの中央に配置するプロセッサーを選択する際には、優れた入出力回路、エフェクトプロセッサーやエンジンをもったハイクオリティなプロセッサーを使用してみてください。全てのチャンネルにおいての通常そして最適なパフォーマンスを得るには、MASTERコントロールの設定を9時半～1時の範囲に設定します。すばらしいサウンドの多くは、ステージで使用するのに適切な音量として10時～12時あたりの設定で得ることができます。

あるヴィンテージ主義の人達は、チャンネルのMASTERをフルの状態にしてGAINコントロールをMASTERとして使う、MASTERコントロールを回路から効果的に取り除くことを好みます。しかし、操作を真似ようとしている“ヴィンテージ・ノン・マスター”アンプの大半は、プリアンプの出力をパワー・セクションの感度に調整または“チューニング”するために、回路内のその場所にディスクリット抵抗が取付かれています。

MASTERコントロールは、設定における可能性を幅を無限に広げる可変抵抗に過ぎず、サウンドの損失は一切なくアンプを使いやすくします。あなたがこの古いアプローチにこだわるなら、ぜひこの方法でFILLMORE™を使用してみてください。アンプを傷つけることはありません。しかし、GAINとMASTERのコンビネーションセッティングの方法を選択しないことで、アンプ本来の潜在的なサウンドをかなり制限してしまうこととなります。

CHANNEL SELECT この3ポジションのミニトグルスイッチで、フットスイッチを使用していないときに2つのチャンネルを選択できます。フットスイッチを使用するには、センターポジションのFT.SW.を選択します。

MODE SELECT 各チャンネルには3つのプリアンプ・モード(CLEAN、DRIVE、HI)のいずれかを選択できるMODE SELECTスイッチがあります。チャンネルの構成は全く同一です(ただし、実際のボットの値の微妙な個体差は除きます)。

POWER 本機に電源を供給するためのスイッチです。電源のアースがとれていることと、またコンセントにも適正な電圧が供給されていることを確認して下さい。アンプを使用していない状態から演奏を開始するときは、STANDBYスイッチの項で述べている手順に従って下さい。真空管に与える問題を減らし、また真空管の寿命を延ばすことができます。

STANDBY 演奏をしていない状態からアンプを使用する際に、このトグルスイッチをSTANDBYの位置にして真空管(特にパワー管)の暖気を行います。まずPOWERスイッチをONにする前に、STANDBYスイッチがSTANDBYの位置にあることを確かめます。POWERスイッチをONにしてから最低30秒間そのまま待ち、それからSTANDBYスイッチを“ON”の位置にします。この手順によって、高電圧が冷えた真空管を直撃することによるダメージを防ぎ、また真空管の寿命を延ばすことができます。

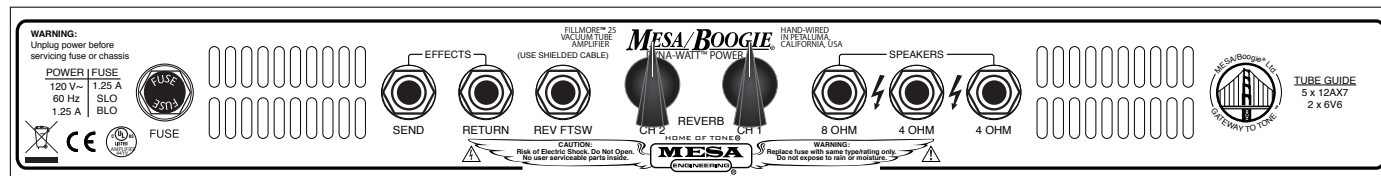
コールドスタート時(演奏していない状態)からの手順:

(アンプの電源を3分以上OFFにするときは、常にこの手順を踏んで下さい)

1. STANDBYスイッチを"STANDBY"の位置にしておきます。
2. POWERスイッチを"ON"に切り替えます。
3. 30秒ほど(またはそれ以上)待って、真空管の暖気を行います。
4. STANDBYスイッチを"ON"に切り替えます。

NOTE: このコールドスタートからの手順は真空管の寿命と信頼性を確保するのに重要な部分です。電球のように、最も消耗するのが電源が入った瞬間(ほんの少しの、最初の数秒)です。また電球のようにもし調光器が付いていて最初の数秒のボルテージを下げられるのであれば、さらに寿命を延ばすことが出来るでしょう。STANDBYスイッチはアンプの調光器のようなもので、上記のような使い方をすれば真空管(特にパワー管)の寿命を長くし、ベストなパフォーマンスを得ることが出来ます。

REAR PANEL



電源コネクター(リアパネル下側)

付属の電源コードを接続するコネクターです。適正な電圧が供給されているコンセントから、付属の電源コードを使ってここからアンプに電源を供給します。なお、付属の電源コード以外のご使用は絶対におやめ下さい(アンプや接続機器にダメージを与えることがあります。またその際の保証は行いません)。

FUSE

外的要因による電源の過大入力またはパワー管に問題がある場合にフューズが切れることがあります。必ずヒューズホルダーの近くに明記されているものと同じ規格のSLO-BLOタイプのフューズに交換して下さい。117V及び100Vバージョンには、1.25AのSLO-BLOフューズが必要です。パワー管のショートは大抵フューズが切れたことが原因で発生します。アンプの裏側に回って、このマニュアルのSTANDBYスイッチの項に書いてあるコールドスタート時からの手順に従って下さい。それからSTANDBYスイッチをON側ににして、パワー管をチェックします。もしパワー管が良くない状態でONにすると、パワー管がアーク放電して(点滅して)いるのが分かります。その時はすぐにSTANDBYスイッチをSTANDBY側ににして、パワー管を交換します(必要があればフューズも交換して下さい)。

EFFECTS LOOP (SERIES)

これら2つの1/4"ジャックはエフェクター/プロセッサーを接続するポイントとなります。エフェクトループは基本的にプリアンプの最後からドライバーステージへのブリッジの回路となり、SENDジャックがプリアンプの最後の信号を拾い、RETURNジャックを通じてドライバーチューブの前のパワーセクションに送られます。

この接続ポイントを使用することによって、最良の外部プロセッサーの信号のノイズ比と音響上のパフォーマンスが得られます。つまり、ここはTRIPLE CROWNのサーキットパスでは重要な意味を持つ分岐点であり、ここにいかなるものが挿入されてもアンプ全体のパフォーマンスに影響を及ぼすということです。

エフェクトループはドライ信号とシリーズ(直列)に配線されていますが、つまり全体の信号はここを通過するという点であり、そこがループから影響を及ぼさない純粋な信号が取り出される、パラレルループとは違うところです。そのため、ループ内で使用する機器の品質とパフォーマンスが、アンプからベストなサウンドとパフォーマンスを得るのに大変重要なのです。我々は、パフォーマンスの面でTRIPLE CROWN

と良いマッチングが得られるか判断するために、機材を購入する前にチェックしてみることをお勧めします。1つのヒントが価格です。市場価格で分割すると、大抵の場合は支払う価格に応じて、広い範囲で商品の品質と音響性能が得られるでしょう。テクノロジーの競争は恐ろしいペースで行われ、機能は常に最先端のものが目指されますが、アンプに求めるサウンドやフィーリングはあなたが決めるものであり、エフェクトプロセッサ機器を選ぶ際、そして・・・結局のところ、ピュアなアナログのチューブアンプの真ん中に何を挿入するかということを、同様に判断することをお勧めします。

お使いのプロセッサを接続するには：

1. SEND端子からプロセッサのINPUTに接続します
2. RETURN端子からプロセッサのOUTPUTに接続します。

これで接続は完了です。

可能な限り最短のケーブルで接続することを心がけてください。非常に長いケーブルを使用する場合は、バッファを使用してください。アンプのエフェクトループがバッファされていても、ケーブルの長さが長くなればなるほど、サウンドに不具合が発生します。

プロセッサをエフェクトループに接続するときは、常にシールドされた高品質のケーブルを使用してください。

あなたのプロセッサの品質をチェックし、またレベルをマッチさせる1つの方法として、以下の簡単なテストを行ってください。：

まず、ループにプロセッサを接続せずにサウンドを設定します。音をしっかり聴いて、フィーリングを覚えてください。

次にプロセッサをループに接続します。そして上記と同じくサウンドを聴いてみてください。

FillmoreのSENDとRETURNからケーブルを外し、音が良くなったりレベルが上がったりすると、プロセッサ側のレベル設定が低すぎるか、クオリティ自体に問題があるか、あるいはその両方であることがわかるかと思えます。エフェクトループからケーブルを外して信号レベルを下げる場合は、単にプロセッサの入力レベルまたは出力レベルを下げます。プロセッサをエフェクトループに接続したり、エフェクトループから再度取り外すときに、レベルに差がないか、または差がごくわずかになるまでテストを繰り返してみてください。

REVERB FOOTSWITCH

この1/4"ジャックにオプションのフットスイッチを接続して、リバーブのON/OFFをリモートコントロールすることができます。リバーブをコントロールするには、標準的な "tip to ground"ラッチング(モーメンタリではない)タイプの別のフットスイッチを使用することもできます。ジャックはモノラルのシールドされていないケーブルも使用可能です。

REVERB

FILLMORE™は、アナログのオールチューブスプリングリバーブ回路を採用しており、微かなかかり具合からフルウェットの "Surf"レベルまで、このアンプのヴィンテージインスパイアされたキャラクターを際立たせる瑞々しいアンビエントリバーブエフェクトを生成します。このコントロールは、アンプ全体で設定を行うのが最も簡単です。ボリュームの相互作用やハーモニクスやレゾナンスの影響を受けずに、設定したとおりのサウンドがそのまま得られるエフェクトなので、事実上独立しています。

つまり、BASSと同じように、GAINコントロールの設定が極端に高いほどより注意してリバーブを設定する必要があります。幸いなことに、ゲインが非常に高いサウンドを使用する多くのプレーヤーは、サウンドに空間の奥行きを特性を追加する主な手法としてReverbよりもDelayを使用する傾向にあります。

しかし、クリッピングしたクリーンサウンドでは、話が変わってきます。クリーンな設定でアンプの音を出す場合、リバーブタンクのサウンドとそのスプリングはアナログ回路と共にオーバードライブされ、サウンドにナチュラルさとヴァイブを保つ上で重要不可欠な部分です。このことを理解した上で、CLEANモードを自由に利用し、プリアンプのGAINコントロールを上げ、REVERBをお好みのレベルに設定してください。覚えておいて頂きたいのですが、リバーブは本質的に、その核の部分で機械的に可動する部分であり、したがってアンプや外部の両方の振動、特定の周波数の振動などの物理的要素の影響を受けます。振動するものは振動するものと共鳴する可能性があります。これは、リ

バープが非常に高いレベルで設定されたときに最も顕著となります。もしこのような現象を経験したことがあれば、最初は単純にGAINとReverbレベルを抑え目に設定し、またトーンコントロールも個々に調整してサウンドを安定させ、かつフィードバックが起こらないようにします。

SPEAKER OUTPUTS これらはキャビネットへのスピーカーアウト端子で、コンボタイプの場合は内蔵スピーカーへ使用されることとなります。先に述べたように、他のスピーカーとの互換性からサウンドに至るまでの数多の理由から、可能な限り8Ωの負荷が好ましく、そのインピーダンスにおいてアンプが最高のサウンドを出力します。

標準のMESA 8Ω 4x12または1x12エクステンションキャビネットを使用してコンボまたはヘッドを使用する場合は、8Ωジャックを使用してください。ほとんどのMESA 2x12キャビネットは8Ωに配線されており、このアウトプットでも使用できます。

2台目の8Ωスピーカーまたはキャビネットを追加する場合、それぞれを4Ωのアウトプットに接続することをお勧めします。現行のMESAキャビネットでは、デジチェーン接続を可能にするパラレルジャックも装備しています。この構成は、8Ωスピーカーを別々の4Ωアウトプットに接続するのと同じこととなります。これにより、インピーダンスの整合性が向上し、フルパワーとヘッドルームを確保することができます。

4Ωキャビネットを単独で使用する場合は4Ωアウトプットに接続します。

16Ωの4x12キャビネットまたは2x12キャビネットを使用する場合は8Ωアウトプットに接続します。若干最大出力が下がりますが、4つまたは2つのスピーカーがカバーするため認識できるほどではありません。2台の16Ωキャビネットを8Ωアウトプットで使用すると、より良いインピーダンスのマッチングとなり、フル・パワーとヘッドルームを得ることができます。

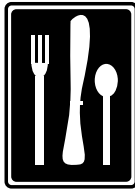
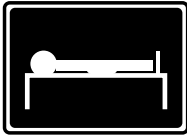
NOTE: 2台の4Ωキャビネットの使用はお勧めしません。理由は、そのような使用に対応した設計がされていない本機のアウトプットトランスに2Ωの過度な負荷がかかってしまうからです。

以下は、いくつかの一般的かつ正しいスピーカーアウトとの接続例です；

- ・ 1台の8Ωキャビネット — 8Ωのスピーカーアウトに接続します(1台のMESA 8Ωキャビネットを使用)。
- ・ 2台の8Ωキャビネット — それぞれ4Ωのスピーカーアウトに接続するか、または1台のキャビネットをMESAキャビネットのパラレルインプットに接続し、2台目をMESAキャビネットの他のパラレルジャックに接続します。
- ・ 1台の4Ωキャビネット — 4Ωのスピーカーアウトに接続します(4Ωキャビネットのいずれかを使用)。
- ・ 2台の4Ωキャビネット — 接続はお勧めしません！本機のアウトプットトランスは2Ω抵抗を接続するようにはセットされていません。
- ・ 1台の16Ωキャビネット — 8Ωのスピーカーアウトに接続します(最大出力が若干下がります)。
- ・ 2台の16Ωキャビネット — パラレルボックスまたは"Y"コネクタを使用して、8Ωのスピーカーアウトに接続します。

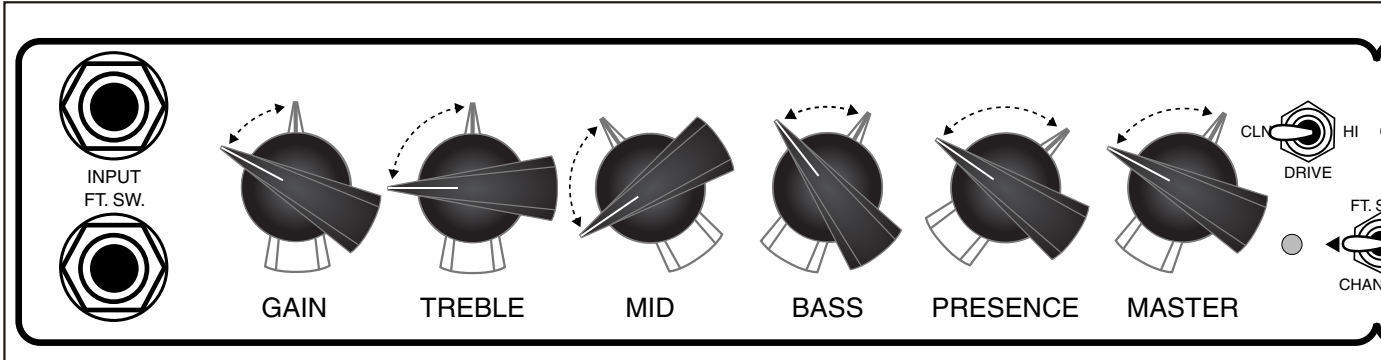
これらの一般的なスピーカーの接続方法は、プレイヤーが行うであろう幅広いセッティングのほとんどをカバーすると思います。またここに挙げていない他の一般的ではない方法もあり、その内のいくつかは安全かつユニークなサウンドのものもあると思います。接続方法に迷った際は詳しい技術者に確認して、決して自分の判断で接続しないことをお勧めします。

REST AREA

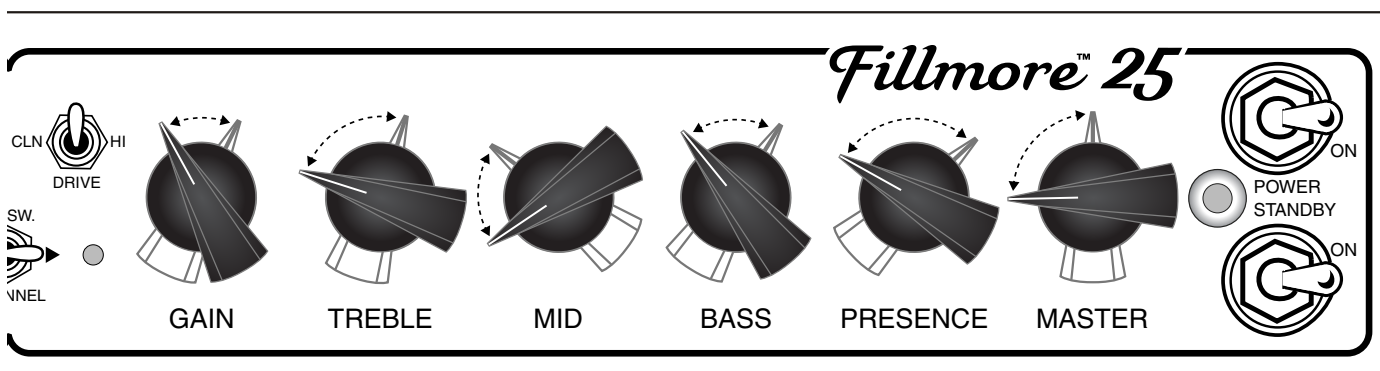


FACTORY SAMPLE SETTINGS

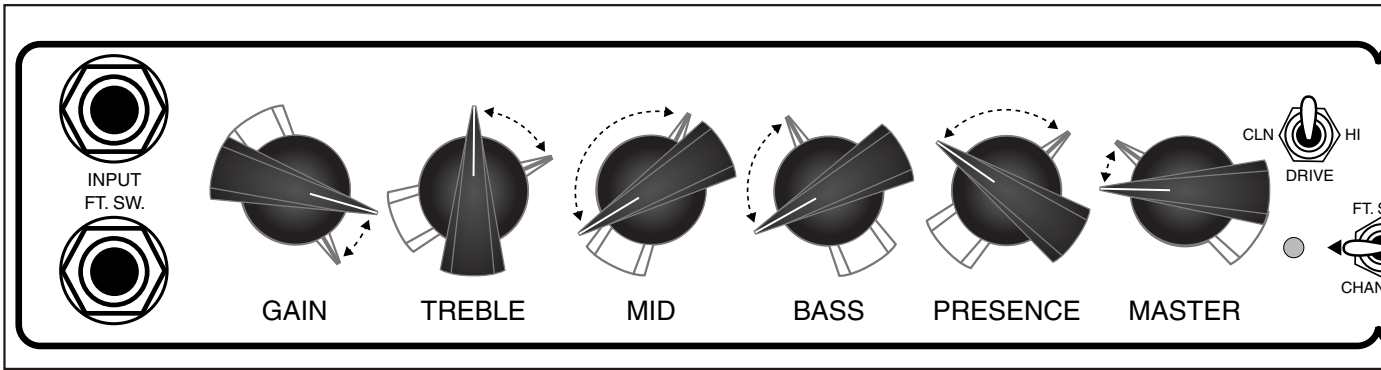
CLEAN



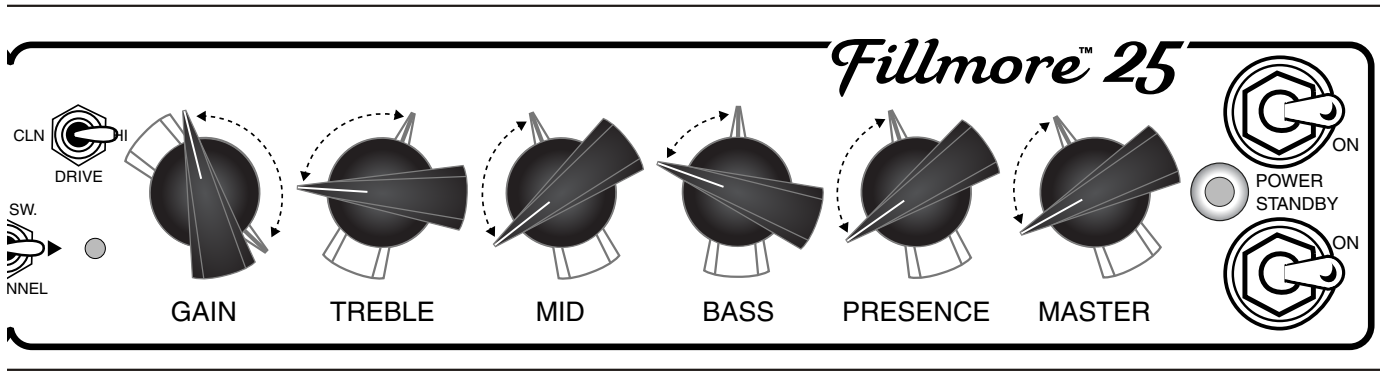
DRIVE



DRIVE CRUNCH

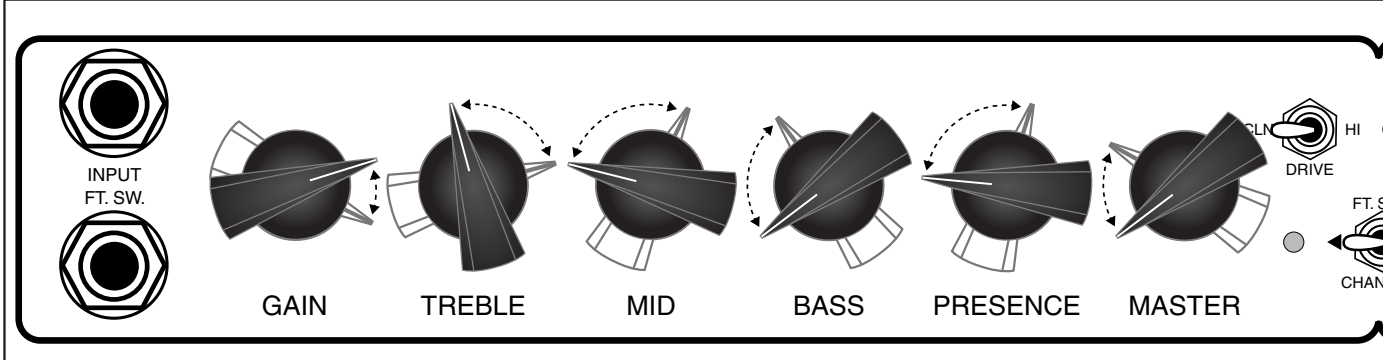


BURN

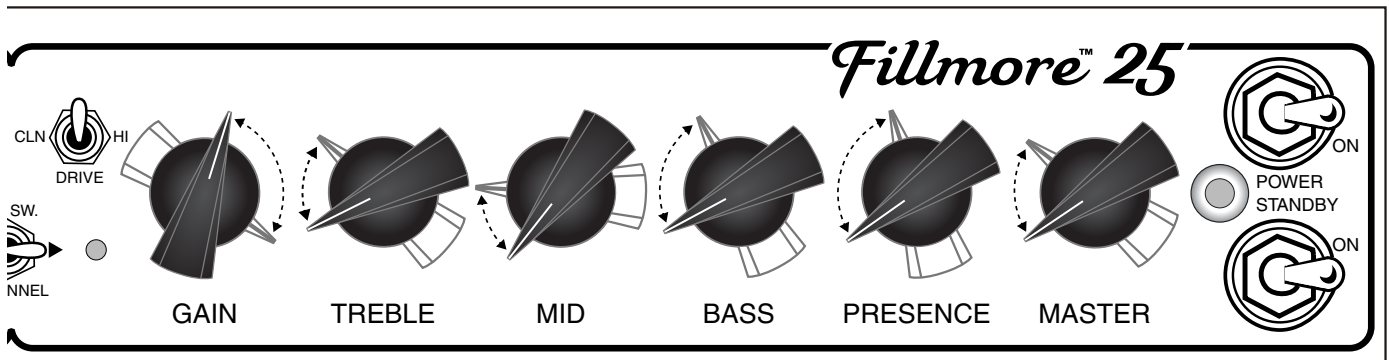


FACTORY SAMPLE SETTINGS

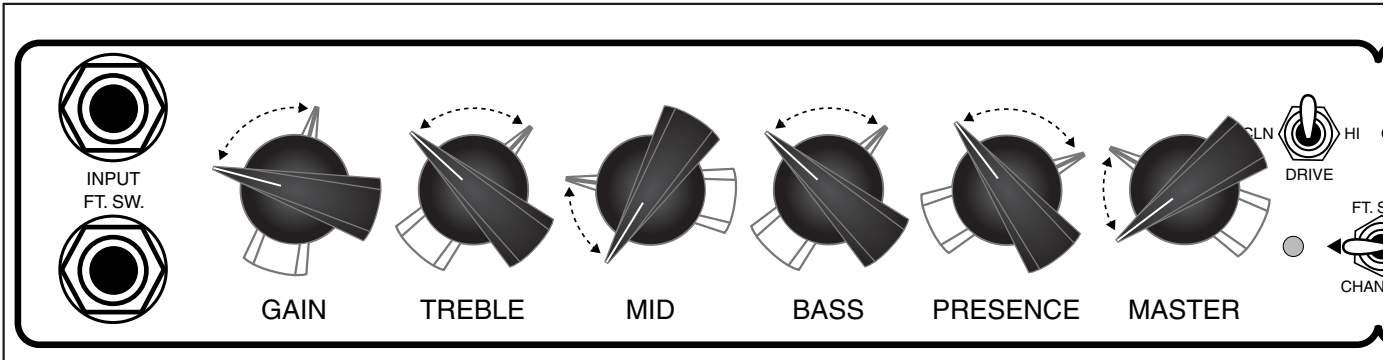
PUSHED CLEAN



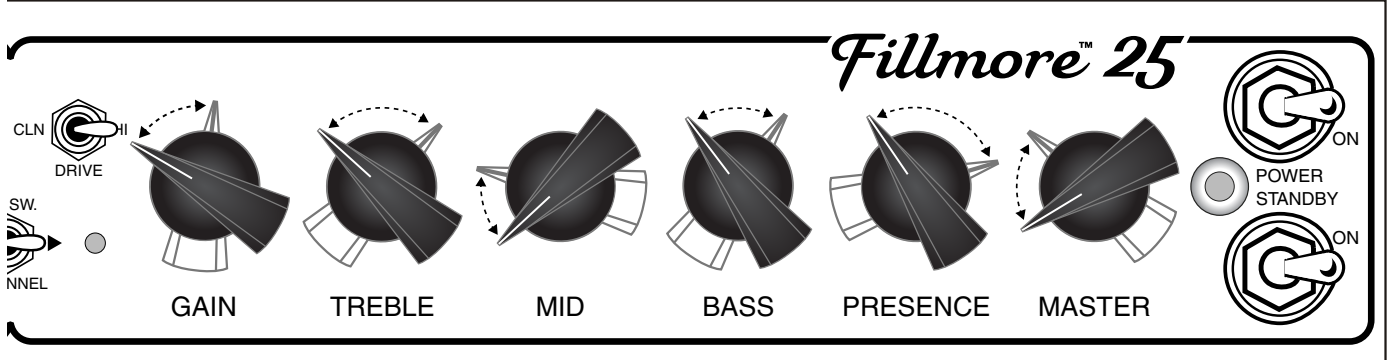
DRIVE SOLO



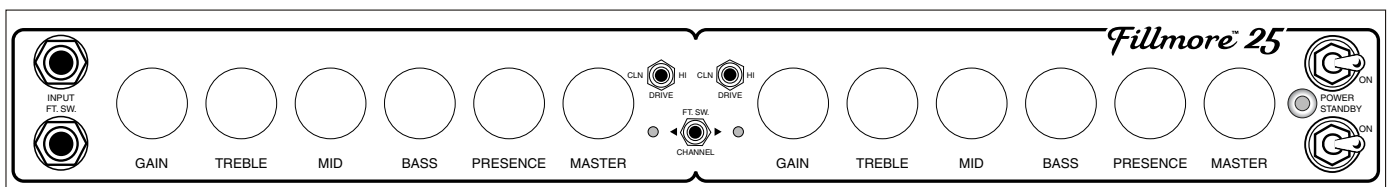
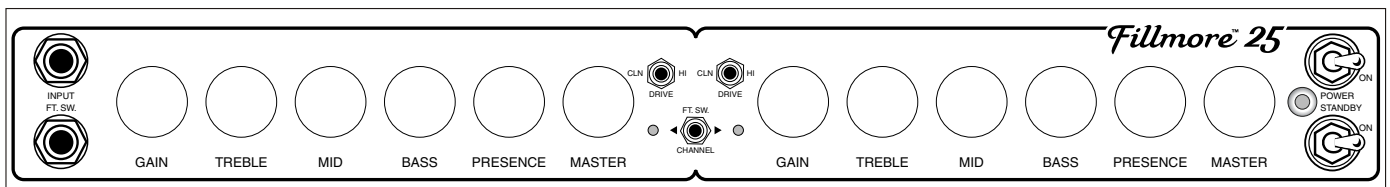
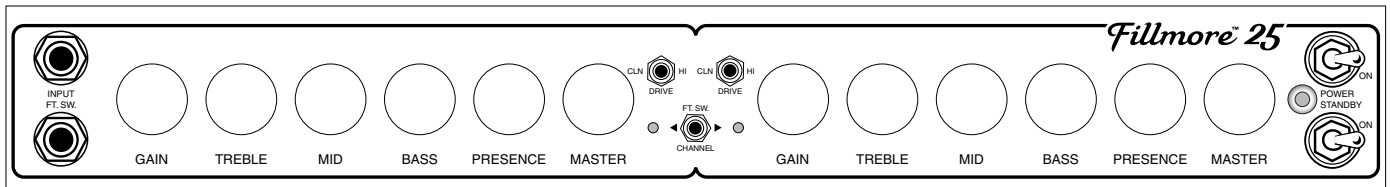
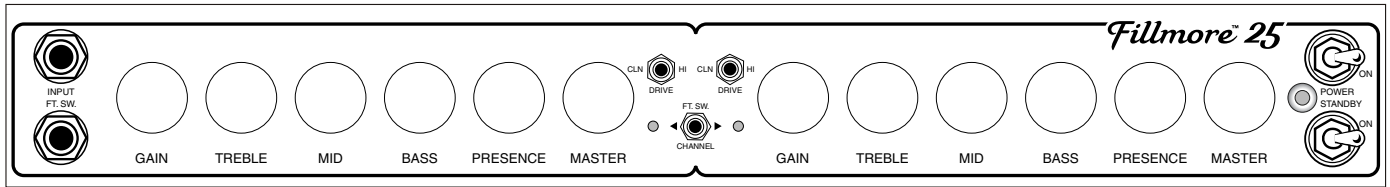
DRIVE "CLEAN"



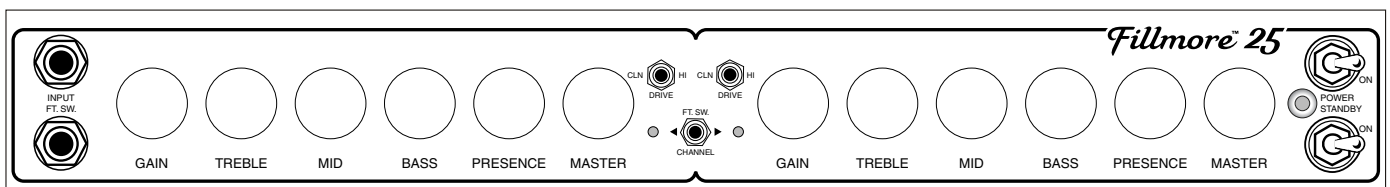
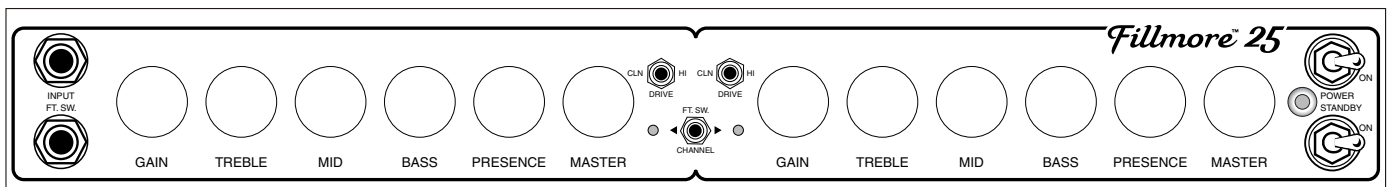
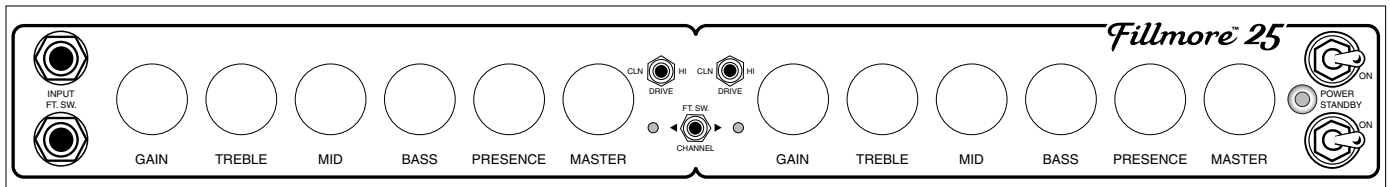
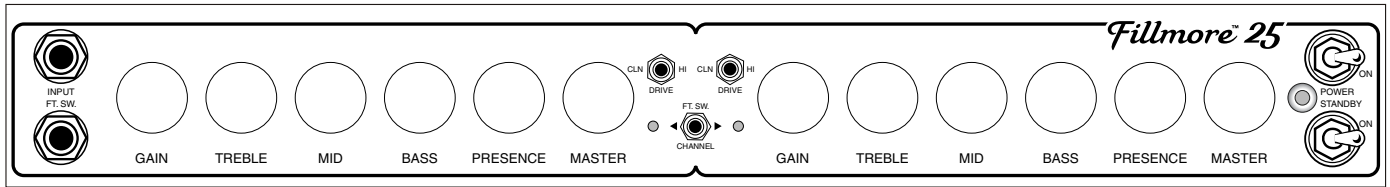
BLUES HI



USER SETTINGS



USER SETTINGS



真空管のノイズについて：

状況によって、真空管のノイズを経験したことがあるでしょう。危険性があるというわけではなく、トーンに影響するものです。真空管の交換は電球を変えるようなもので必ずしも技術者に依頼しなければならないというものではなく、実際にやってみるとそう難しいことではありません。(ですが、やはり慣れていない方には楽器店に相談の上、技術者による交換を依頼することをお勧めします)。

真空管を交換する際に最初に我々がお勧めしたいのは、アンプを安定した台の上に乗せて頂くことです(そうすれば腰を曲げることなくアンプ内部の真空管を確認出来ます)。また、真空管を交換する際に照明が当たってチューブソケットがはっきり見えます。アンプを使用した後で真空管に触る際は、大変高温になっていますので十分に注意して下さい！ まだ熱を感じる場合は、布きれ等を使って真空管を持つようにします。また真空管のシルバーの先端の下のガラス部分はあまり熱を帯びていないのでそこを持った方が交換しやすいはずですが、また真空管をソケットに固定する際も、外す際と同様に優しく持ちます。

パワー管の問題を診断する：

パワー管の問題は主に二つあります：ショートか、ノイズです。たいていそのどちらかの問題に陥るのですが、診断と処理は通常シンプルです。

フューズが飛ぶときは、軽度か重度かに関わらずたいていがパワー管の故障が原因です。軽度の場合は、電子流が制御格子を超えて、過電流が流れるというものです。音が歪んだり少しハムノイズが聞こえてきたりする場合は、アンプをSTANDBYにしてすぐパワー管をチェックします(赤くなっているかを確認します)。ショートしてる管がバイアスを下げるためたいていペアの二つが熱くまた発光していますが、一つだけが熱く発光している場合は、それだけが原因です。数分間赤くなってなければ、他の二つは問題ないでしょう。

この場合は物理的に真空管の内部でショートは起こらず(電子流が暴れているだけです)、しばらくSTANDBYにしてそれからONに戻せば、一時的には問題はなくなっているはずですが、それからまた真空管をチェックして、再び同じ問題が起こるようなら、問題のある真空管がオーバーヒートを起こすので特定することが出来ます。

重度の故障の場合はあまり問題は簡単ではなく、最悪の場合は真空管の内部でショートが起こり、スピーカーから大音量のノイズが発生します。その場合はただちにアンプをSTANDBYの状態にして下さい(おそらくそれまでの間にフューズが飛びます)。またそのようなショートの場合は、真空管内部の部品同士が接触し、故障の状態になります。パワー管の交換と、SLO-BLOタイプのフューズの交換を行い、このマニュアルに書いてある方法で再びアンプの電源を入れます。

真空管のノイズ：

ノイズはしばしば真空管内の汚れが原因だったりしますが、真空管のガラスを指で軽く叩いてみると、ノイズの質が変化して音が聞こえたりします。しかしながら、12AX7を指で軽く叩いたときにスピーカーから何らかのノイズが聞こえるのは通常の状態です。INPUTジャックに近い管の音は大きく聞こえるもので、何故なら二つ目の12AX7管がアウトプットを増幅しているからです。

パワー管は通常指で叩いても常に静かなはずですが、叩いた時にパチパチやシーツと音を立てるときは、おそらく問題があります。パワー管のノイズを確認するには、アンプをSTANDBY状態にして、問題のあると思われるパワー管をソケットから抜いて、また戻してみます。ハムノイズが聞こえるようなときは、プッシュ・プル真空管マッチングバランスが崩れています。問題があると思われる真空管を突き止めるときはいつも、POWERスイッチやSTANDBYスイッチを常に片手で触れながら、トラブルが発生したときにすぐにOFF出来るようにしておきます。

もし問題がどこにあるか分からないときは、疑わしいものだけを新品の真空管に交換する方法をお勧めします。チューブ交換の方法については、前述の説明を参考して下さい。同じチェックをするだけなら、技術者にアンプを送って真空管交換を依頼するよりもご自分でするほうが手間ではないかも知れません(それでもやはり自身での交換に不安がある場合は、最寄りの楽器店にご相談下さい)。

プリアンプの真空管の問題を診断する：

チューブ仕様のアンプを使用したことがあれば、プリアンプの真空管ノイズを経験したことがあるかも知れません。しかし、これがすぐに故障に繋がるというわけではありませんので、安心して下さい。この不安を解消する一番の近道は、真空管を交換することです。

最初に、なるべくアンプのパフォーマンスを落とさないためにも、少なくともいくつかの予備のプリ管を準備しておくのが良いでしょう。ちょっとしたプリ管の問題というのは、主に二つのカテゴリーに分けられます：ノイズと、マイクロフォニックノイズです。ノイズの種類は、パチパチ音であったり、ホワイトノイズ、ヒスノイズ、ハムノイズ等があります。マイクロフォニックノイズとは、ゲインや音量を大きくしたときに、金属的かつ周波数の高いサウンドでハウリングを起こすものです。マイクロフォニックノイズは、楽器側の音量を絞ったり、楽器をアンプから離すことでハウリングが止まるかどうかで、問題を分けることが出来ます。

(ハウリングがピックアップのフィードバックによるものであれば、これでハウリングが止まるからです)。また機器の振動やショックによっても引き起こされます("マイクロフォンを叩く"というのが、マイクロフォニックノイズの語源になっています)。

1つのモードやチャンネルのみでプリ管の問題が起こるのであれば、その問題を解決する最善の方法は真空管の交換です。反対に、特定のモードやチャンネルにトラブルの原因が絞れない場合は、全てのモードやチャンネルに関わっている、プリ管に問題があるのかも知れません。あるいは、可能性は低いですが、ドライバー真空管に問題があるかも知れませんので、特定のモードやチャンネルに特定できない場合は、ドライバー管を交換する方法もあります。ドライバー管の問題は、一般的にパチパチ音やハムノイズがアンプの出力から聞こえる、または全てのモードでアンプの出力が弱くなるという症状となって現れます。

たまた弱ったドライバー管がアンプのサウンドをフラットかつ生気のないものにすることがありますが、ごくまれであるため、同様の問題が生じた場合はやはりパワー管の劣化が原因と考えられます。

トラブルの原因が特定できない場合に、一番早くて確実な方法は、プリ管を同時に交換することです(その後どこに問題があるか分かったときのために、外した真空管を保管しておいて下さい)。INPUTジャックに近い真空管のサウンドがノイズっぽく感じられるかも知れませんが、それはその真空管が一番最初に信号が通る真空管であり、その後で出力が他の真空管により増幅されていくからです。その理由から、"インプット・ソケット"(通常V1と表示されています)に装着する真空管は最もノイズが少ない物を選びます。

プリアンプの後段 - パワー管の直前 - の真空管にノイズがなければ、ほとんど問題は発生しません。このアンプには最も適正な真空管が装着されていますので、真空管を交換する場合は全部一度に外すのではなく、一つ一つ外して取り付けるようにして下さい。また問題の無かった真空管に戻す時は、必ず元々装着してあったソケットに戻すようにして下さい。また真空管を交換するときは、アンプの電源をSTANDBYにしてから行って下さい(そうすることで、スピーカーから大きなノイズが出ることを防げます)。

そうしないとたとえゆっくり真空管を取り外したとしてもノイズが発生します)。

もしアンプを運搬する必要がある場合は、アンプ本体(シャーシ)を新聞紙等で包んでください。また包んだアンプ本体と段ボール箱に間に、15センチ程の隙間("クラッシュ・スペース")を空けて下さい。エアークッション("プチプチ")等で包むのも良いですが、発泡スチロールはなるべく使用しないで下さい

(運搬中に発泡スチロールが擦れて、その粉がアンプ内部に入り込み、電子部品に損傷を与える可能性があります)。

プリアンプ管は一般的には劣化することはありませんので、気分的な交換はあまり良いアイデアとは言えません。もし交換しても結果が変わらない場合は、元に戻して下さい。まれなことではありますが、もしトラブルシューティングの手順の中で損傷していることが分かった場合は、適切に交換を行って下さい。

注意：プリ管を指で軽く叩いた時に金属っぽい音がするのは異常ではありません。真空管からパチパチ音等が出力されない限りは、通常通りに使用することができます。

スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

MESA/Boogie アンプは、4 オームと 8 オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、4 オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。2 オームを扱う事の出来る数少ないアンプ (例えば MESA (メサ) の Bass 400+) であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値 (例えば 16 オーム等) の場合はアンプを傷める事はありません。

ミス・マッチング:

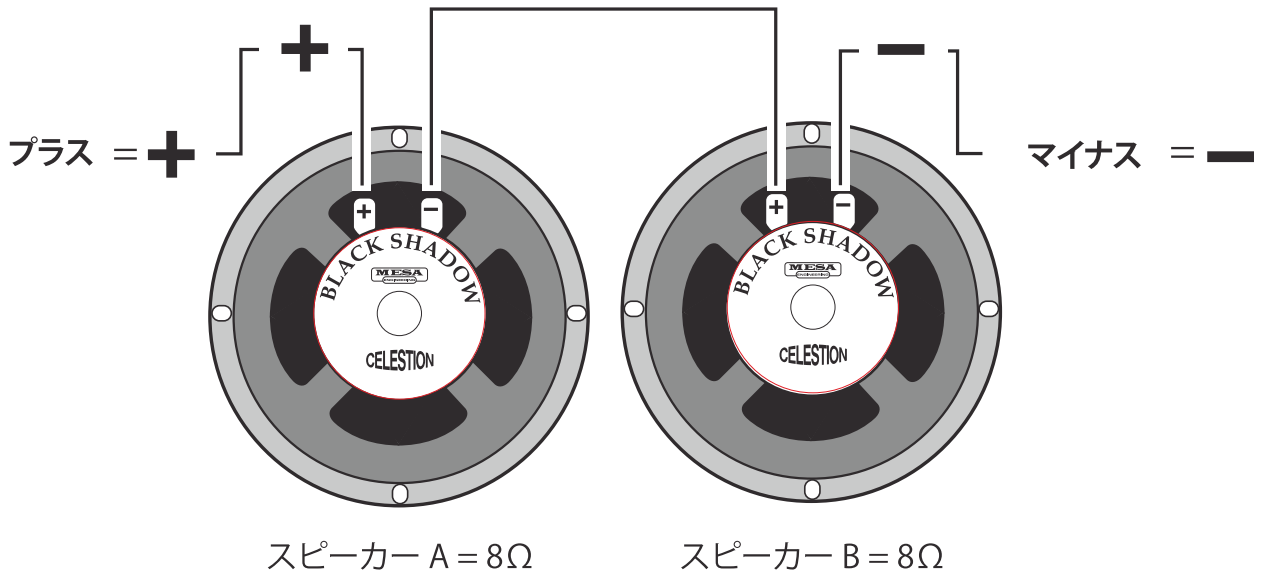
高い抵抗値 (例えば 8 オーム出力を 16 オームのキャビネットに接続) でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の 1 つになるほどです。

キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが 1 台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の 3 種類になります。:

シリーズ (直列):

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、8 オームのスピーカーを 2 台直列に接続した場合は、16 オームになります。

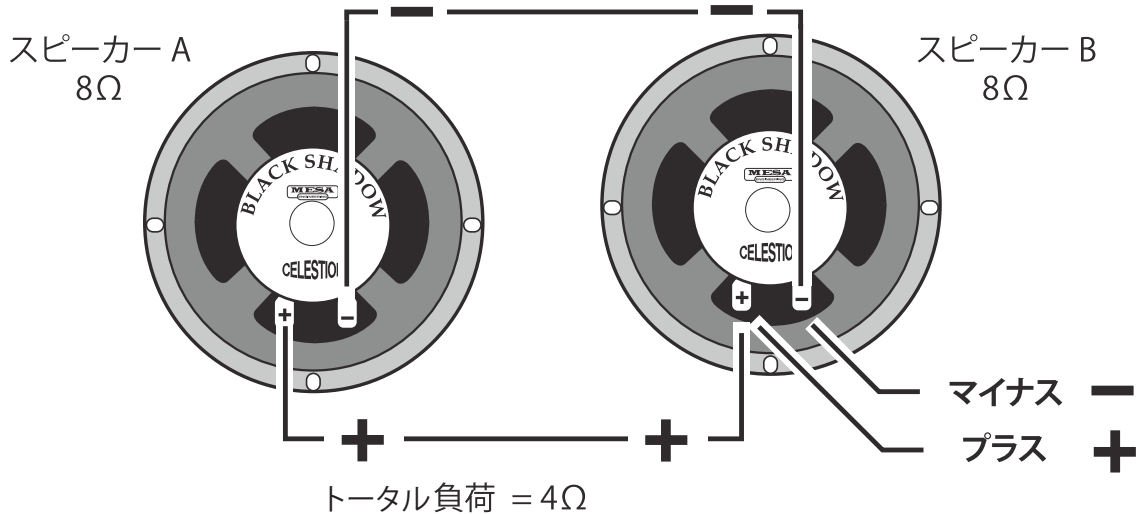


シリーズ (直列): スピーカー A のマイナス端子と
スピーカー B のプラス端子を接続

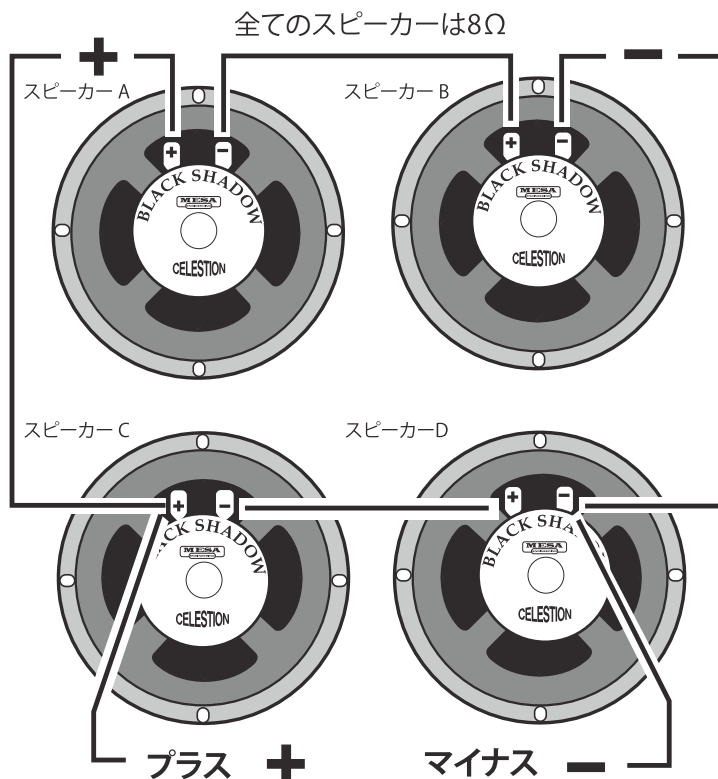
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド(続き):

パラレル(並列):

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。2台の8オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー(例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等)を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば8オームと4オームであれば、 $8 \times 4 \div (8 + 4) = 2.6666$ オームになります。パラレル(並列):スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



シリーズ(直列)とパラレル(並列)の組み合わせ:



これは、2セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかける様にする事です。

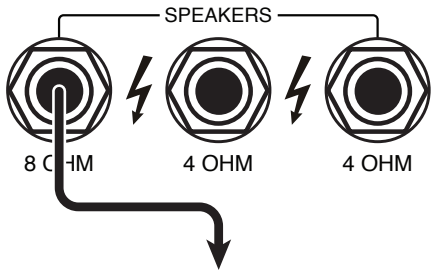
スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

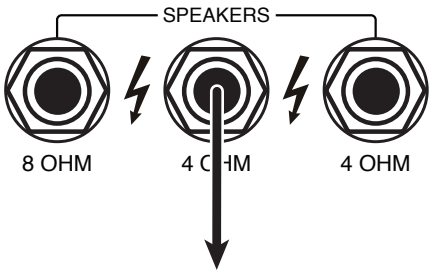
4台の8オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、8オームになります。

接続方法-アンプからスピーカーキャビネットへ



①

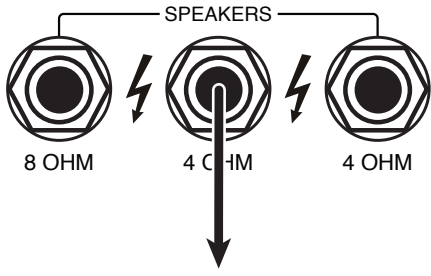
8 Ohm Cabinet



②

4 Ohm Cabinet

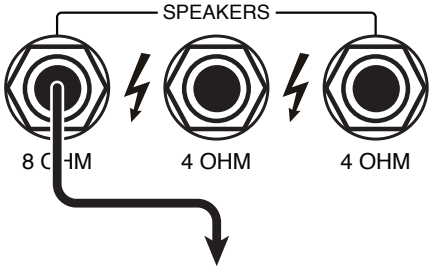
③



8 Ohm Cabinet

安全なミスマッチ

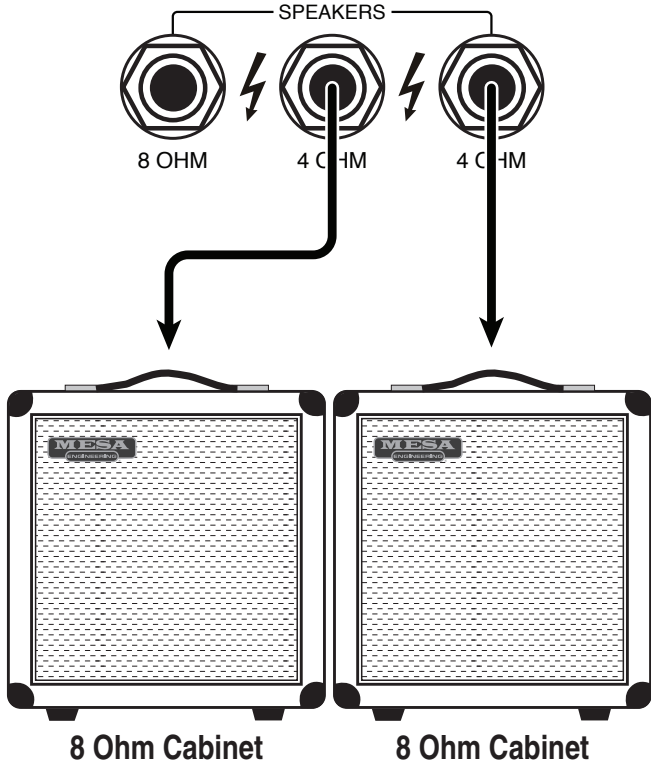
④



16 Ohm Cabinet

安全なミスマッチ

接続方法-アンプからスピーカーキャビネットへ

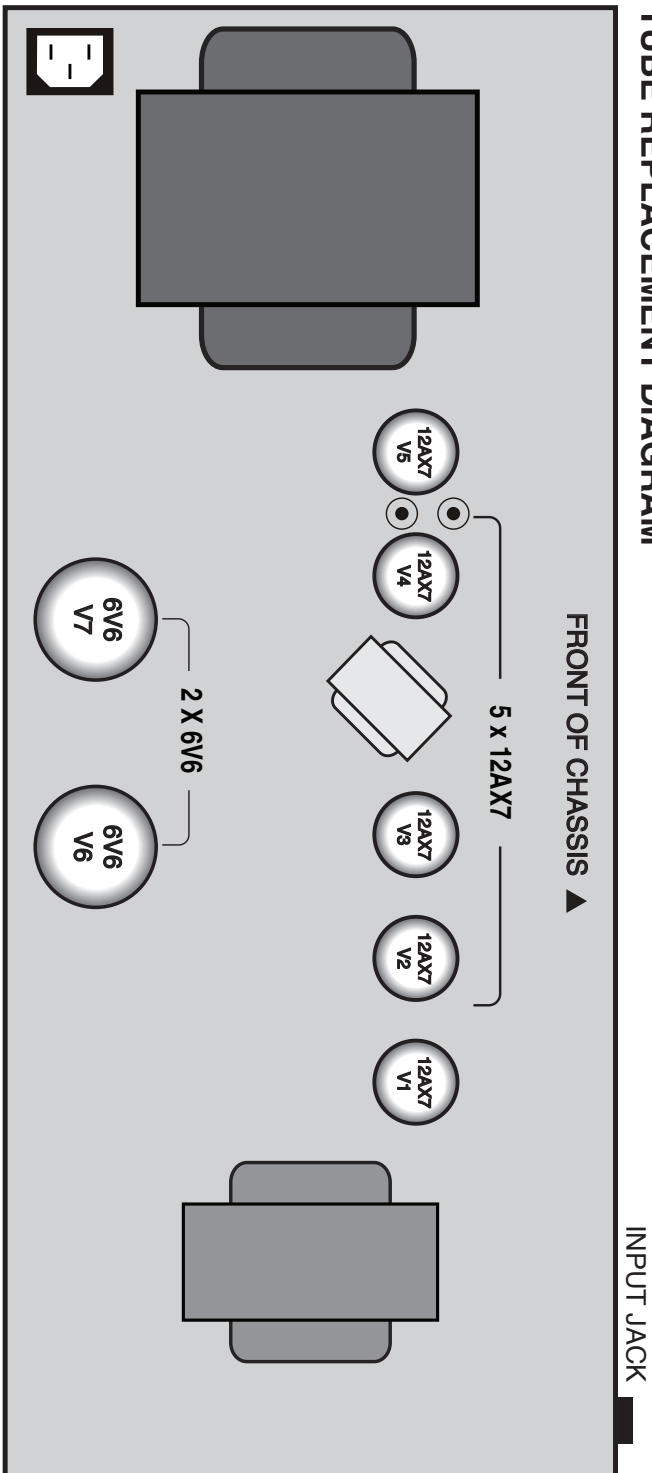


5

真空管を交換する前に、必ずPOWERとSTANDBYスイッチをOFF

FILLMORE™ 25

TUBE REPLACEMENT DIAGRAM

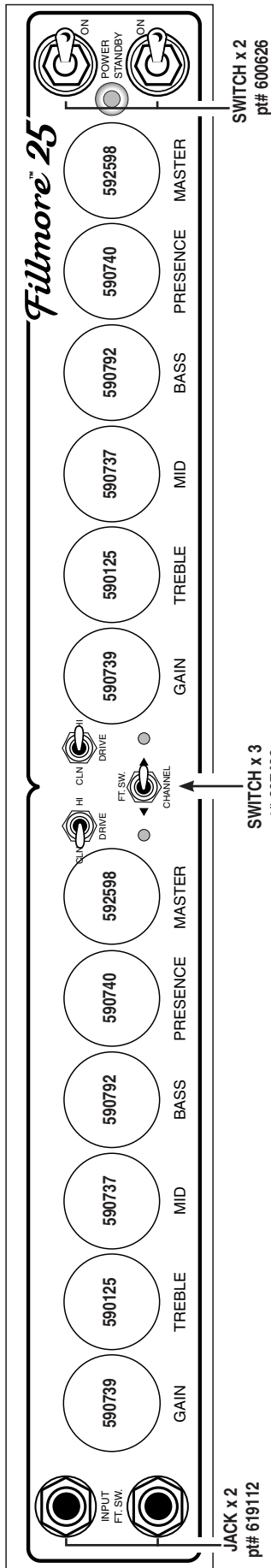


PREAMP TUBES

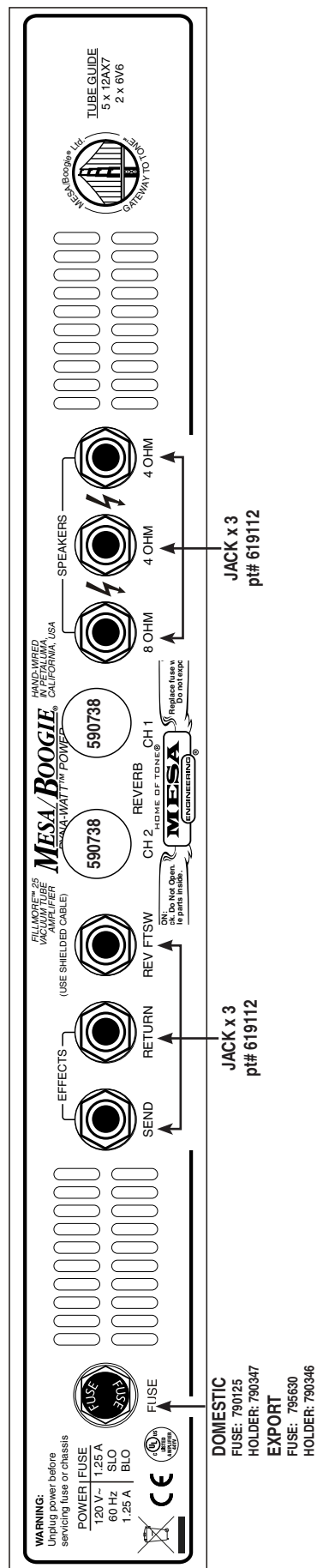
- | | |
|---|---------------------------|
| V1A - INPUT STAGE DRIVE/HI | V5A - REVERB RETURN STAGE |
| V1B - INPUT STAGE CLEAN, 2ND STAGE DRIVE/HI | V5B - REVERB SEND STAGE |
| V2A/B - TONE CONTROL DRIVER | |
| V3A/B - DRIVER/PHASE INVERTER | |
| V4A - LOOP RETURN | |
| V4B - REVERB MIXER | |

FRONT PANEL: FILLMORE™ 25

**ALL KNOBS
PT# 408670**



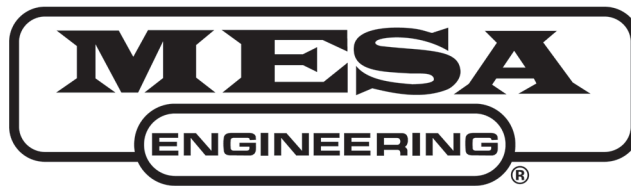
REAR PANEL: FILLMORE™ 25



MESA/BOOGIE[®]

The Spirit of Art in Technology[™]

Thank you for trusting MESA/Boogie[®] to be your amplifier company and we wish you many years of toneful enjoyment from this handcrafted instrument.



The Spirit of Art in Technology™



ギブソン・ブランズ・ジャパン株式会社

Email: service.japan@gibson.com

「@gibson.com」からのメールを受信できるよう設定をお願いいたします

お電話でのお問い合わせ窓口：0120-189433（通話料無料）

受付時間 9:30 - 17:00（土、日、祝日、年末年始を除く）